

目的 大都市圏を中心に、高騰する地価のもとで、より多くの住戸数を確保すべく高層住宅の建設が進み、今や市街地の住宅建設は高層住宅が一般的である。その住戸設計においても、経済性主導の論理から、間口幅が狭く、奥行の深い住戸が多く、住まい方から検討した改善の方向が望まれる。

そこで本研究は、高層住宅の住戸プランについて、居住者の住まい方および住要求を探り、家族の成長・変化に対応した住み分け方の可能性をもつ居室の分割・接続の仕方、仕上げ、間口幅等の検討をするものであり、本報では、寝室のとられ方および居室の状態と家族構成の違いによる就寝の実態を報告する。

方法 間口幅5.5m前後、奥行12m前後、12～14階建の片廊下型高層住宅を対象とし、東京都区部に所在する公団賃貸住宅3団地を選定し（昭和60、61年建設）、留め置き法によるアンケートおよび家具配置の調査を行った。

総戸数441戸中、調査票配布数274戸、有効回収票数は255票で、回収率は92%であった。調査時期は昭和62年7月下旬である。

結果 寝室として最もよく利用されているのは、バルコニーに面した（多くは南面）和室6畳の主寝室（C）で、次いで外廊下に面した居室（D）である。（C）室と並び、食事室と隣接する（B）室は、家族構成の違いにより、居間、寝室あるいはその兼用がみられる。（C）室が寝室としての条件がよいため、幼児の就寝分離が進みにくい。子供が中学生以上になると（D）室が有効に対応し得ている。